

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

言語と文化 11巻 : 言語・文化センターだより

出版者	法政大学言語・文化センター
雑誌名	言語と文化
巻	11
ページ	265-269
発行年	2014-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/8931

▶ 言語・文化センターだより ◀

言語・文化センターでは2012年度に以下の企画を実施した。
ご担当の近江屋志穂先生と酒井健先生にそのご報告をいただいた。

法政大学言語・文化センター所属、法学部教授 近江屋志穂

法政大学言語・文化センター、ボアソナード記念現代法研究所およびソルボンヌ＝パリ第三大学ブルースト研究所との共催により、2012年4月21日、ブルースト研究所所長、ピエール＝エドモン・ロベール教授を迎え、ボアソナード記念現代法研究所会議室（BT22階）にて、作家の日記をテーマとする国際シンポジウム、「20・21世紀のフランスの小説における日記－フランス語教育を視野に入れて」を開催いたしました。

この企画はロベール先生と共同で進めて参りました。先生はブルースト研究所の権威であられるばかりでなく、短編集と小説をあわせて7編刊行されております。また、フランス語教育にも熱心に取り組まれ、ソルボンヌ大学フランス語教育学部長を7年間務められました。幅広い分野に通じていらっしゃるロベール先生のご協力により、フランス文学、フランス語教育、日本文学にまたがる専門家が集い、文学研究及び教育という共通の視点の下に、また日仏対比という観点から、様々な問題を論じる機会を持つことができました。

シンポジウム当日のプログラムは午前と午後の部に分かれ、長時間に及びました。ご参加下さいました方々に心より御礼申し上げます。

また、本シンポジウムの内容は「言語と文化」第11号別冊というかたちで刊行させて頂きました。これはセンター運営委員の方々、事務の方々のご理解とご尽力のおかげでございます。皆さまにあらためて深く感謝申し上げます。

法政大学言語・文化センター／ボアソナード記念現代法研究所共催シンポジウム
「20・21世紀のフランスの小説における日記
ーフランス語教育を視野に入れて」

日時：2012年4月21日（土）9：15～17：45

会場：〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1 BT22階 ボアソナード
記念現代法研究所会議室

使用言語：フランス語／日本語（各発表に通訳あり）

主催：法政大学言語文化センター

共催：法政大学ボワソナード記念現代法研究所

*入場無料

内容：

9：15～開会挨拶

ビエール＝エドモン・ロベール（ソルボンヌ＝パリ第三大学）、近江屋志穂

午前の部 司会：近江屋志穂

9：30～「日記による自己表現のためのフランス語学習」 小松祐子

10：30～「日記が作品かーアルベール・カミュ『手帖』の生成過程について」
高塚浩由樹

11：15～「小説の形式としての日記」 ビエール＝エドモン・ロベール

午後の部 司会：ビエール＝エドモン・ロベール

14：30～「異文化教育と日記」 近江屋志穂

15：30～「ブルーストが模作したゴンクール兄弟の『日記』」 増尾弘美

16：15～「柳田国男の日記」 岡村民夫

17：00-17：45 パネル・ディスカッション 司会：近江屋志穂

2012 年度 公開シンポジウム報告

法政大学言語・文化センター所属、文学部哲学科教授 酒井 健

「欲望と表現 2012 バタイユ没後 50 年—ポスト・バタイユ思想の展開」

言語・文化センター主催公開シンポジウム

2012 年 12 月 1 日（土）、12 月 2 日（日）

法政大学市ヶ谷キャンパス・外濠校舎にて開催

2012 年はフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）が没してからちょうど 50 年にあたる年である。この間に彼の思想がどのように継承されていったのか検証してみたく、公開シンポジウムの企画を立ち上げた。

バタイユそのもののシンポジウムならば、これまで各地で何度も開かれてきた。ポスト・バタイユ、それもバタイユの継承者たちとなると、今回のこのシンポジウムがはじめてである。没後 50 年という節目にふさわしいだけでなく、それ自体重要な視点である。実現する価値のある試みだと判断した。



もちろんバタイユの思想の継承といっても一直線ではない。批判もあれば留保もある。別な思想への展開もあれば、意識的な離脱もある。その多様な関係を包含しうるテーマとして、「欲望」と「表現」を選んだ。

他方で、バタイユの思想からインパクトを得た表現者はフランスでも日本でもあまたいる。今回はそのなかでもバタイユの没後 50 年の間に彼の思想と目立った関係を持った人々を抽出し、考察を絞った。日本では三島由紀夫と岡本太郎、フランスではモーリス・ブランショ、ミシェル・フーコー、ジャック・ラカン、ピエール・クロソウスキー、ジャック・デリダ、ジャン＝リュック・ナンシー、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンである。

発表は、酒井が三島と岡本を担当したが、7 人のフランスの思想家に関しては講師をお招きしてご登壇をお願いした。招待講演者はいずれもそれぞれの専門分野で、バタイユ研究で、高い実績をあげてこられた方ばかりである。

シンポジウムは、2012 年 12 月 1 日（土）と 2 日（日）の二日間にわたって、法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎で行われた。専門家、院生、学部生、そして一般の方々と、予想をはるかに超える来場者に恵まれた。お越しいただいたすべての方に、ここに厚く御礼を申し上げたい。

発表後にその原稿を公表して今後の研究に資するというのがシンポジウムの理想である。言語・文化センターの構成メンバー、執行部、そして事務の方々のご理解とご尽力があって、ここにこの理想の実現に至った。深く感謝の意を表したい。

公開シンポジウム

法政大学 言語・文化センター主催
法政大学 文学部・哲学科協賛

欲望と表現

2012 バタイユ没後 50年

ポスト・バタイユ思想の展開



Georges Bataille
« Obstruction »

ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の没後、彼の思想は現代思想の目撃者たちに
どのように継承されていったのだろうか。

バタイユと彼らに関連の重要なテーマ「欲望」と「表現」から、
展開の歴史を探る。

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 4階 S407教室（入場無料）

日時：2012年12月1日（土）・2日（日）12時30分開場、13時開演（予約不要）

問い合わせ先：法政大学 言語・文化センター Tel. 03（3264）4742

第1日 12月1日（土）

- 1) 日本人の継承 池井健
「三島由紀夫と国本太郎：歴史性と演劇性」
- 2) モーリス・ブランショ 門間広明
「バタイユとブランショ：『移装』をめぐって」
- 3) ミシェル・フーコー 市川崇
「知の限界を問う欲望-フーコーによるバタイユ読解」
- 4) ジャック・ラカン 上川幸司
「『優先欲』あるいは世界の外に懸れること」

第2日 12月2日（日）

- 1) ビエール・クロソウスキー 入森智樹
「バタイユとクロソウスキー：『わが個人ウダ』をめぐって」
- 2) ジャック・デリダ 岩野卓司
「くそ真面目なバタイユ：『ジャック・デリダ「無限経済から
奇逆経路へ ある国民なきヘーゲル主義」の可能性と限界」
- 3) ジャンロリュック・ナンシー 西山道也
「バタイユとナンシーにおける思考とイメージ」
- 4) ジョルジュ・ティディコベルマン 江岸健一郎
「バタイユとティディコベルマン：不定形と徴候」